



野球一筋で視野が狭かった自分。 ブラジルでの経験を通し、新しい生き方を見つけた。

高校時代は選抜甲子園大会に出場し、4番打者として準優勝に貢献した黒木豪さん。
現役引退後は、中学校で非常勤講師を務めるなか、社会人としての「引き出し」がない自分を実感していました。
「このままではダメだ」と、視野を広げるために日系社会青年ボランティアに参加し、
ブラジルの子どもたちに野球の指導をすることを決意。しかし現地で思わぬ反発を生み、派遣早々、窮地に立たされてしまいます。
黒木さんが周囲の信頼を取り戻し、感動的な涙の別れを迎えるまでの波瀾万丈の道のりとは？
そして母校の大学で、かつての自分のような学生たちの背中を押し、JICAボランティアに送り出している
現在についてもお聞きしました。

野球の世界しか知らず、社会に出て考えの狭さを痛感。 派遣前訓練での貴重な出会いが今後の道しるべに。

私は小学生の頃から大学まで、野球漬けの日々を送っていたのですが、大学卒業後、公立中学校の非常勤講師として子どもたちと接しながら、自分自身の経験のなさを様々な場面で感じていました。そんななか、大学の先輩から日系社会青年ボランティアについて教えてもらったのですが、これまで海外に興味を持ったこともなかったため、自分には関係ないことと最初は受け流してしまいました。
ある日、体育の授業でいじめの現場に遭遇し、授業後にいじめていた生徒たちを呼んで指導しました。自分としては最善の策だと思っていましたが、先輩の先生に報告したところ、「黒木の考え方もいいけど、自分だったら授業後ではなく、その場で対処した」と言われ、なるほどと思う反面自分の考えの狭さや解決力のなさを痛感しました。この一連の出来事が、日系社会青年ボランティアに参加して自分の視野を広げたいと思った直接的なきっかけといえます。その後、父親と飲みに行き、「JICAでブラジルに行って、子どもたちに野球を教えたい」と打ち明けると、「おお、行け！行動せよ！停滞するくらいなら、若いうちに動きまわって」と背中を押され、迷いが吹っ切れたのを感じています。
派遣前の研修では、エネルギー的な仲間がどんどん個性を主張させている姿を目の当たりにして、自分はこれまでごく隠れた人として生きていかなかったのだと改めて気付かされました。私が主に属していた体育会系の人間関係では、個の意見を主張することが基本的にタブーとされています。ですから、はっきりと意見を主張している人たちを見て、「大丈夫かな？」と心配になったのですが、ケンカではなく議論の場から、自分の考えを述べることはなんの問題もないのだと教えられ、目からウロコが落ちました。派遣前訓練でいろんな経歴や価値観を持つ方と会うことができたのは、野球しかやってこなかった自分にとって、今後の道を示してくれる大きな一歩になったと思っています。

▼ 子供たちに野球を指導する黒木さん



派遣早々、反発に戸惑いながら、やるべきことを模索。 信頼を勝ち取るために必要なのは覚悟と責任感。

派遣されたブラジルのサン・パウロ州インディアトゥーバ市には、日系移民とその子孫が多く住んでいます。日本語や太鼓、よさこい、盆踊り、すき焼き祭りなど、日本文化を紹介するような催しも積極的に行われているこの土地で、私の任務は日系移民の子どもたちに野球の指導をすることでした。
野球を教えるうえで一番大変だったのが、「礼儀指導」です。日本式の礼儀を教えてほしいというのはもともと派遣先から出ていた要望でしたが、疲れるとすぐに力を抜いたり、試合で大差をつけられると途中で戦意を喪失したりするなど、自分がこれまで体験してきた“全力でプレー”“すること”で得られる野球の素晴らしさを、現地の子どもたちはまったく理解していない印象を受けました。そこで私はまず、「全力で取り組む」ことをテーマに掲げました。すばやい集合や、指先まで美しい“気をつけ”、グローブなどの道具を大切に扱う精神、グラウンドに落ちている石を率先して拾うなど、野球に対する考え方や認識を根本から改め、模範になるようなチームを作りたいと思ったのです。
しかし、保護者の方々にきちんと説明をしないまま、いきなり厳しい指導を始めてしまったこともあり、早々に反発を受けてしまいました。最初は友好的だった現地のコーチの態度もだんだん変わってきて、13人いた子どもたちも1カ月間で3人にまで減ってしまう始末。役員会で、私の指導について目の前で批判される場面もありました。「今までのブラジルのやり方を尊重したほうがいい」という人もいれば、「ブラジル人に合わせた指導をしたら、黒木が日本から来た意味がない」という人もいて、板挟みの状態でした。そんななか、最も信頼を寄せていた方が、「黒木のことを信じてみようじゃないか」と、矢面に立ってみんなを説得してくれたのです。その方の「一緒に頑張ろう」という一言で、自分自身も緩をくることができました。
残ってくれた3人の子どもたちには、礼儀指導とともに、試合をしっかりとできるくらいの体力をつけ、技術面では打撃、走塁、守備という3つの基礎を教え込みました。彼らはめきめきと上進し、試合でも結果が出るようになってきました。練習に来なくなった子どもたちは、その頃、試合にだけは参加していたのですが、3人の噂や実際の活躍を目の当たりにして焦りを感じたらしく、ちらほらと練習に戻ってくるように、先が見えない不安な時期に、「黒木がやりたいと思う方法で、しっかりと教え続けていけば、子どもたちも絶対に戻ってくる」と励ましてくれた方がいたので、本当にその通りでした。
予選全敗だったチームが、半年の猛練習でブラジル全国大会3位の成績を収めたときは、思わず泣いてしまいました。帰国前の送別会には300人近く集まっていたとき、そのときも号泣。振り返ると、泣いてばかりでした(笑)。

▼ 2013 WBC にブラジル代表のコーチとして参加



行動を起こすことの大切さを知ったブラジルでの経験は 凝り固まった考え方を自由にしてくれた。

2年間の派遣期間が終了してからも、現地でお世話になった方に誘われて再びブラジルへ戻り、現地のベースボール・アカデミーで子どもたちに野球を指導し、さらにはプロとしての実績がないにもかかわらず、WBCでブラジル代表のコーチを務める幸運に恵まれました。ボランティアでブラジルに行くことと決めたとき、その4年後に私がWBCのコーチになっていることを想像した人はひとりもいなかったと思います。あのときの決意が、人生のターニングポイントでしたね。
※2013WBCでブラジルは予選リーグを突破し、決勝まで進むが、日本と対戦して3-5で敗れた。
現在は母校の日本大に帰り、国際交流センターでJICAボランティアの窓口を担当しています。仕事の中でボランティア経験者の講演を聞く機会も多いのですが、私と同じように、自分の指導方針を押し通すか、それとも現地の方々の考え方や文化に合わせて指導すべきなのか、ふたつの選択を突きつけられて悩む人が少なくないことを知りました。私とは逆の選択をされた方も多くいらっしゃるようですが、それぞれに状況がまったく異なるので、その選択自体に正解・不正解はないと思っています。それよりも大切なのは、自らの選択に対して責任を持つこと。配属先の方や環境のせいにするのではなく、自分で選んだことに覚悟ができるかどうか重要なのだと、今になって強く感じています。
私自身ができたのは、正直なところ、その瞬間、瞬間でベストを尽くすことくらいです。日系社会青年ボランティアに参加する以前の私は、自分から行動を起こす気がほとんどなかったし、周りの物事に対してアンテナが立っていない状態でした。しかし、父親に後押しされるかたちでボランティアに参加して、行動することの大切さを学び、人生の選択肢や考え方そのものがとても広がりました。実を言うと、いざとなったらブラジルでラーメン屋さんをやるのかな、と思っていた時期もあるくらいです。サンパウロのリベルダーシという日本人街には、日本のようなおいしいラーメン屋がまだないので、きょうとうまいく気がして(笑)。ブラジルでいろんな経験をさせてもらったことで、これほどまでに考え方が自由になっている自分自身に驚きましたし、嬉しくもありました。



JICA ボランティアで得たもの

自分で行動して得た経験は、その人だけの強みになる

JICAボランティアで得たことはたくさんありますが、あえてひとつあげるなら行動することの大切さです。テレビや書籍、インターネットなどでいくらでも情報を集めることのできる時代ですが、実際に行動することで得られる情報は、ほかとは一線を画しています。3年、5年と先々まで人生設計をすることも大切ですが、進むべき道を選んでいるようなときは、思い切って行動してみると世界が広がって、選択肢が増えることもあると思います。そしてボランティアで得た経験を生かすことができれば、それはきっとその人だけが持つ強みになるはずです。

これからJICAボランティアを目指すみなさんへのメッセージ

自分の「ものさし」を増やすつもりでチャレンジを！

青年の方々に關しては、自分の「ものさし」を増やすつもりでどんどんチャレンジしてほしいと思います。
私も活動中は「チャレンジ=成長」だと信じて、七転び八起きを実践していました。
シニアの方々に關しては、今まで培われたスペシャリストとしてのご経験を存分に生かしていただきたいと思っています。
また私自身、背中を押してもらえたことでボランティアに参加することを決意できました。
現在の仕事でも学生たちの背中を押してあげることの大切さを実感しています。
みなさんの後輩への温かいアドバイスは、彼らにとって大きな励みになると思います。